

アフリカの解放運動はいかにして「テロリスト」のレッテルを貼られたか

マックスウェル・ボアマ・アモファ

RT 2025 年 1 月 1 日

<https://www.rt.com/africa/610196-liberation-movements-labelled-terrorist-by-west/>

欧米の植民地支配者たちは長年にわたり、自分たちは自由のために戦い、「野蛮で悪魔のようなテロリスト」から現地の人々を守る救世主として描いてきた。

何世紀もの間、アフリカ諸国は植民地主義の束縛からの自由になるために戦ってきた。彼らは奴隷船で大西洋を渡って西インド諸島に強制連行され、ヨーロッパ経済のためにサトウキビやタバコを栽培させられた。また強制的に徴兵されて世界大戦で植民地大国のために戦わされた。あるいはフランスのジャルダン・ダクリマ、ベルギーのタービュレン公園、あるいは遠く離れたアメリカのルイジアナ購入博覧会など、人間動物園の檻に入れられたりした。

植民地支配者たちは、アフリカ諸国への支配を正当化するために、アフリカの自由戦士たちにテロリストのレッテルを貼る手段をとった。使われた法の支配という概念は、実際は抑圧的な植民地法の支配だった。

ネルソン・マンデラの投獄は、この戦略を思い起こさせる。

彼は、オランダとイギリスの植民地政策に深く根ざしたアパルトヘイト体制の抑圧から南アフリカを解放しようとしたが、テロ活動に関与した疑いで投獄された。アパルトヘイト体制を解体し、南アフリカを平和な時代に導いた功績で 1993 年にノーベル平和賞を受賞したが、マンデラはその後も 2008 年まで米国のテロリスト「リスト」に載せられていた。

福音を自分の利益のため都合よく解釈する

このレッテル貼りの戦略は、ヨーロッパの植民地主義の黎明期にさかのぼる。彼らは、「発見」という教義を、暗黒で原始的な大陸を「文明化」する普遍的な法的原理として描きだし、アフリカの土地を占領し、キリスト教のヴェールの下に自分たちの価値観を押し付けつけた。実際には、キリスト教は人々の資源を略奪する口実として使われた。

ベルギーのレオポルド国王は、1883年に宣教師たちに宛てた手紙の中で次のように認めている。

「あなた方は確かに伝道するために行くのですが、伝道はベルギーの利益を引き出さなければなりません。コンゴでの宣教目的は、決して***人に神を教えることではありません。彼らはムングとカンサンビとかなんとか語を話し考えています。殺すこと、他人の妻と寝ること、嘘をつくこと、侮辱することが悪いことだと知っています。それを認める勇気を持ちなさい。教える必要はない。あなた方の本当の役割は、行政官や実業家の仕事をやりやすくすること、つまり、世界のその地域で自分たちの利益を守る最善の方法で福音を解釈することなのです。そのために野蛮人たちが地下にある豊富な富に関心を持たないように監視し続けなければなりません」。



したがって、それが「フランス文明化ミッション」であれ、イタリア人の「文明化ミッション」であれ、ポルトガルの「ルソトロピズム」であれ、黒人に対する英米の帝国政策を正当化するために使われた「白人の重荷」であれ、その意図は同じであった。

ナチス・ドイツのアフリカ戦略を彷彿

20世紀前半、植民地勢力はアフリカ領での地保を固めた。しかし大きな問題に直面した。ひとつは、ケニアのキクユ族のような人々の激しい抵抗だった。かれらはその土地に経済的・社会的基盤をしっかりと持ち離れようとしなかった。

1950年代、イギリス植民地軍に土地を占領されたキクユ族をはじめとするケニアの人々は、自分たちの土地を守るため、武装抵抗運動を結成した。これに対してイギリスは、「アンビル作戦」を開始した。その一環として「強制収容所」を設置し、ここで何十万人ものケニア人が強制労働させられた。これらの収容所では、女性に対するレイプや性的虐待、飢餓、鞭打ち、収容者の殺害、死が日常茶飯事だった。



1952年のマウマウ反乱に参加した証拠を探すため、彼らの小屋が搜索される間、カリオバンギ村の男性に銃を突きつける英国警察官。

この状況を体験したイギリスの作家ニコラス・ランキンはこう回想している。

「短パンにシャツ、バタのサンダルを履いて父の書斎の床に座っていた私には想像もつかなかったことだが、勇敢なイギリス人である私たちが今、強制収容所を建設していたのだった」。

これらの収容所での拷問は非常に残酷で、植民地のエリック・グリフィス＝ジョーンズ司法長官は「ナチスドイツの状況を彷彿とさせる」と述べている。自由を求めるマウマウ闘争の間、100万人以上が収容所に入れられ、13,000人のケニア人が残酷に虐殺され、約1,000人がイギリスの植民地軍によって絞首刑に処されたと推定されている。一方1954年までに闘争で命を落としたイギリス人はわずか32人だった。



1952年、ケニアの収容所でのマウマウの容疑者たち

「人間の尊厳を守る」という神話

ケニアでは、その残虐行為を行っていたのに、植民地支配者はマウマウ抵抗軍こそがテロリストであり、イギリス国民を殺害しており、植民地支配者の活動は文明世界のエージェントによる文明化ミッションであると主張した。

1952年のニューヨーク・タイムズ紙はこう書いている。

「白人宣教師が憎むべき帝国主義と結びつけられるのは、現代においては避けられない。反乱軍は宣教師に盾をついて、キリスト教を拒絶する。アフリカでは、これは無神論や不可知論に立ち戻るという意味ではないようだ。異教への回帰、ヒョウ男への回帰、儀式的殺人への回帰、原始的な魔法と恐怖への回帰を意味し、それがマウマウのやり方なのだ」。

この批判は、「人間の尊厳を守る」といって植民地に適用するキリスト教の原則に懐疑的になり始めていたアフリカ人への直接的な反応と見ることもできる。アフリカの人々は植民地キリスト教政権の偽善を見抜き始めた。なぜなら、これらの宣教師の多くは植民地政府の自宅警備員としてケニア国民と積極的に戦ったり、収容所で働きながら拘束されたマウマウの人から情報を得るために残忍な方法を用いたりしていたからである。

「狂信的、獸的、悪魔的、野蛮、劣化、無慈悲」

1952年、メディア、特に広範囲に届く新聞は、もっぱら植民地大国の物語にスポットライトを当てていた。いわゆる非常事態を装って植民地政府の利益に沿わないアフリカのメディアを禁止した。

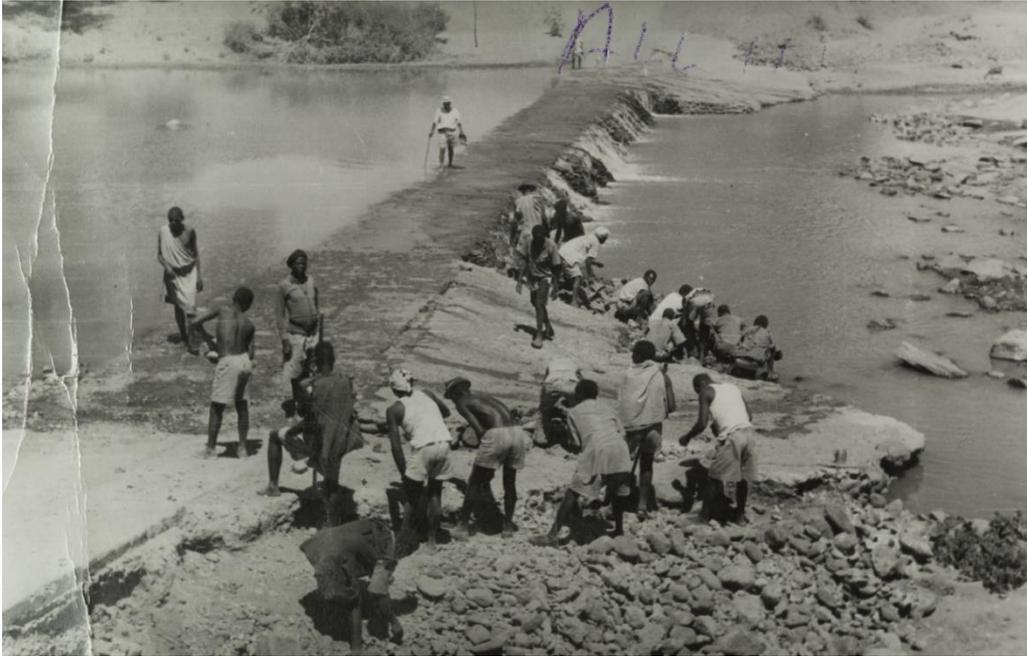
でっちあげが、認識された特定の側面を強調して支持を集めることだとすれば、イギリスの報道機関はそのための完璧な雰囲気を提供した。彼らの行動によって、植民地政府は2つの主要な物語に基づいて情報発信をコントロールすることができたからだ。ヨーロッパの軍事機構の優位性がひとつであり、もう一つは、自由のためにたたかうマウマウにテロリストのレッテルをはり、白人至上主義の植民地支配者が人々を救う救世主と描くことである。



ケニアの収容所に収容されたキクユ族のメンバー。英国当局は1952年12月3日、この部族がマウマウ・テロリストの反乱に加担しているとの疑いを一身に抱いた。

イギリスのマスコミは「狂信的、獸的、悪魔的、野蛮、墮落した無慈悲なマウマウのテロリストたちによって虐殺される英雄的な白人たち」について書いた。

このような民族主義的なレトリックは、植民地行政が本国での支持を集め、植民地間の分裂を生み出すために必要なものであった。分裂は、解放闘争を支持する人々と、「植民地の救世主」をイギリスの分割征服政策の一環と考える人々の間におこった。分割征服の戦略は、1884年/1885年のベルリン会議後に植民地大国の間で流行した。



ケニアのマウマウ囚人に対する政府の「リハビリテーション」プログラムの一環としてダムを建設する囚人たち

21 世紀におけるテロリストのレットルの武器化。

テロリストというレットルは、「中東の狂犬」と呼ばれたムアンマル・カダフィのように、植民地主義の強固な支配からの解放を望んだアフリカの指導者たちに対して使われてきた。この称号は、クワメ・ンクルマのように、アフリカ諸国をゴールド・ディナール通貨で統一しようとしたリビアの指導者に与えられたもので、アフリカの資源を搾取し、世界の覇権を維持しようとする人々の既得権益を脅かすものだった。この称号を初めて使用したのはアメリカのレーガン大統領だった。彼は、「この中東の狂犬は、世界革命、イスラム原理主義革命を目標としており、それは多くのアラブ同胞を標的にしている」とのべた。

カダフィがアフリカ諸国を統一しようとした努力は、その後、この物語によって影を潜め、自国民に対するテロリストとして描かれた。

中東の狂犬であれ、サヘル諸国の革命政府であれ、シリアの虐殺者であれ、このようなレットルは2つの大きな理由から植民地政策に不可欠なものであっ

た。 アフリカでは、帝国主義大国という主な脅威にアフリカ人が団結しないようにし、エネルギーを自由のために戦う同胞のアフリカ人に向けるようにすること、そして第二に、植民地支配者が国際社会から支持を得られるようにすることだ。(了)

筆者は(西アフリカ移行期正義センター(WATJ) 調査官、アフリカ開発のための国際パートナーシップ(IPAD) コーディネーター)

【翻訳チェック 田中靖宏】